

ビバハウス便りNo. 54 春はもうそこまで！

ビバハウス運営委員会 委員長 安達俊子

今日3月5日は、この厳しい北の国にも、いよいよ春の訪れを告げる日となった。2月末の東京での若者自立塾塾長会議、3月初めの国立大雪青少年交流の家（北海道美瑛町）での青少年自立支援協議会への参加と、ゆっくりビバに居れなかった夫が、久しぶりに朝早く鶏小屋に行くと、普通の卵の半分くらいしかない、可愛い卵が3つも産み落とされていた。本当に私たちにとっては、奇跡としか言い得ない出来事だった。

実は、2月末の吹雪を交えた突然の大雪で、ニワトリ達の運動場の囲いよりも大量の雪が積もり、柵をらくらくと超えたキタキツネに、卵を産んでくれていた6羽の親鳥たち全部が持ち去られてしまっていたのだ。飼い主の不注意のために、命を奪われたニワトリたちのことを思い、申し訳なさ、後悔で、暗澹たる気持ちにさせられていた。

まるで私たちの思いを慮ってくれているように、1羽だけ生きのびた若いメスが、私たちを励ますように人生初めての大仕事で卵をプレゼントしてくれたのだ。命のたくましさや命の連続性を、まるで私たちに教えてくれるように、この一羽の若いメスは、生きているのだ。もう春はそこまで来ているのだ！

2月の後半は、私たちにとっても大雪との戦いの期間だった。2月17日、日光市で開かれた、「若者自立支援指導者養成フォーラム」（NPO法人ハートネット主催）に招かれて、16日の早朝に千歳飛行場に着いたが、吹雪のため約4時間以上飛行場で待たされた。予定した行路が使えないために、日光市の宿に着いたのは、ほぼ午後11時50分だった。12時までが、使用時間ということで、冷え切った体を一刻も早く温めたいとお風呂に直行した。衣類を脱いで、お風呂に入ろうとすると、「ここは男湯なんです」との声がした。朝からのハプニング続きで、すっかり神経が麻痺してしまっていることを思い知らされ、ほうほうのていで退散した。

このフォーラムへは、宮本みち子さん（放送大学）、ため塾の工藤定次さん、仙台のわたげの秋田淳子さんなども招かれているので、それぞれの施設の特性などを知っていただくためには、よい機会を提供して下さったと思っている。ビバとしては、あくまでそれぞれの親御さんたちとの密接な連携なしには若者を育てあげることはできないとの思いを伝えたいと願った。過去の「ビバハウス便り」にも何度も書いたように、両親、特に母親との信頼関係こそ、若者たちの心の安定感に欠かせないものであることを、今回も訴えさせていただいた。

23日夕には、とてつもなく楽しい会が待っていた。兵庫県の加古川温泉で、『遠足』の本の出版を企画している大阪高校生活指導研究会の皆さんが、全員であらかじめ私たちの『ひきこもりの若者と生きる』を読んでいて下さり、ありのままの感想を10人全員が聞かせて下さった。真正面から、私たちの問題提起を受け止めてくださる方が、ここにいる、それだけでも身が震えるほど嬉しかった。この思いをかみ締めながら、24、25日の、姫路での親の会「みやすの鐘」の皆さんとの交流、生野学園の見学に備えた。（続く）